淡シ、時ニ尾ヲ擧ゲ、旋轉シテ鳴ク、

〔和漢三才圖會四十五龍蛇〕避役（大びもり）　十二時蟲

本綱客州交州生人家籬壁樹木間、守宮之類也、大小如指、狀同守宮、而腦上連背有肉鬣、如冠幘、長頸長足、身青色、大者長尺許、尾與身等、嚙人不可療、其首隨十二時變色、見者主有喜慶、又云不能變十二色、但黃褐青赤四色而已、蓋是五色守宮焉、嘗云、守宮以朱飼之滿三斤、殺乾末以塗女人身、有交接事便脫、不爾如赤誌之說、萬畢術博物志墨客揮犀皆有其法、大抵不眞、恐別有術矣、所謂守宮者恐此十二時蟲矣、至尋常守宮既不堪點臂、亦未有螫人至死者也、

〔傍廂後篇〕ゐもり　やもり　とかげ

和名抄に、蝘蜓、一名蜥蜴、一名蠑螈、本草云、龍子、一名守宮、和名止加介　蘇敬注云、常在屋壁、故名守宮也とありて、ゐもり、やもりも、ひとつに擧げられたり、これをわけていへば、蝘蜓はゐもりにて、守宮はやもりにて、龍子はとかげなるべし、水中に在りて、堰埭の水を守る義にて、ゐもりといひ、家の籬壁の間に居るを、屋を守る義にて守宮といひ、草のかげ、石垣の間などに居るを、處蔭といふなるべし、今世男女の中の事につきて、水中のゐもりを黑燒に製するよしいへるは、據たがへるなるべし、陶弘景云、蝘蜓喜緣籬壁間、以朱飼之、滿三斤、殺乾末塗女人身、有交接事便脫、不爾如赤誌、故名守宮、三蟲ともに毒蟲にて似よりたるものながら、とかげは美麗に見えて、やもりはきたなげに見ゆるものなり、ゐもりは小魚と同じさまに、小兒もとらへて、小器の水中に飼ひ置く事あり、女の身にぬるは、今のやもりなるべし、

〔三養雜記四〕守宮の辨

ゐもり、やもりは、二蟲、名實を、ある人問けるにこたへて云、昔より守宮をゐもりに充れど的當ならず、漢書顏師古註に、守宮蟲名也、術家云、以器養之、食以丹砂、滿七斤、擣治滿杵、以點女人體、終身不